



コミュニケーション重視の英語教育について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 珠喜 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005955

コミュニケーション重視の英語教育について

堀江珠喜

「英語がしゃべれない」ことにコンプレックスを抱く日本人は多い。府大学生の多くも、英語の文法力、読解力、そこそこの作文力を身につけ、とりあえず必要な単語を知っているにもかかわらず、やはり「しゃべれない」ことに少なからず不安を抱いている。そこで私が英語の授業で目指したいのは、実際のコミュニケーションの道具として英語が使えるという自信を、彼らに与えることである。（なお本論でのコミュニケーションとは、直接的対人の場合に限定し、文章によるものではない。）

<conversationではなく communication>

あえて私は conversation という言葉を用いない。「会話」ではなく「意思疎通」の能力を学生に習得して欲しいからだ。それは相手に（できれば）好感を持たれながら、こちらの気持ちや主張をわからせる能力でもある。良い印象を抱いてもらった方が、何事においても望ましい結果の得られる可能性が高いのが、人間関係というものだ。逆に人間関係の悪化は、さまざまなトラブルを招くことにもなる。（セクハラだって、その根本的原因が人間関係の悪化である場合が多い。）学生が将来どこへ行こうが、どんな職業に就こうがコミュニケーション能力は身を守るために必要となるはずだ。外国と言っても英語が通じるとは限らないのだから、「英会話」より応用のきくコミュニケーション能力の方が大事に決まっている。

では、両者はどう違うのか。次の事例で考えてみよう。（匿名にするが実話である。）

語学力に優れているが、身体が不調なことを理由にさまざまな雑用を免れていた某教官を、ある日廊下で見かけたF教授が「お加減いかがですか」と尋ねたところ、「よけいなお世話です」との言葉が返ってきた。二人はそれまで敵対関係にあったわけではないが、以後、F教授一派がこの教官に好感を抱けなくなったのは当然だろう。

ではこの短いやりとりを英訳してみよう。"How are you?" "It's none of your business!" — 英会話の本には記載されていないだろうが、文法的には正しいし、喧嘩を売るつもり conversation ならこれで良いだろう。また英国では、他人に干渉することはタブーで、お節介な質問にはこんな風に言い返されるとの話はよく聞く。だがいくら英国でも、同僚から、"How are you?"と尋ねられてこう答えるのは、かなりエキセントリックな人物だろう。

英語としてこの返答は決して間違っていないが、私が教えたいコミュニケーションの類ではない。むしろこの場合なら"Thank you"を連発するか、ただ愛想よく微笑んで会釈しただけの方が、（疑問文にこう答えるのは文法的に誤りだろうが）コミュニケーションとしては、

はるかに好ましかろう。つまり、いわゆる語学力とコミュニケーション能力とは必ずしも一致しないのだ。

とはいえ、決して私は語学教育の意義を否定しているわけではない。ただこのようなことも含めてコミュニケーションの難しさと本質とを認識したうえで、より効果的な道具として英語が用いられるように、学ばせたいのである。そこでもう一つ、今度はコミュニケーションにおいて、言葉以外の部分が意味を持った実例を紹介したい。

北イタリア・ベルガモ郊外の高台で休息していた時のことである。遠くでジェット機が飛び立ち、景色の写真を撮っていた夫が振り返って私に、「飛行場があるんだ」と日本語で言った。すると私の横のベンチでそれまで無言で菓子パンをムシャムシャと食べていた年配の白人女性が、すかさず私に"Si, l'aeroporto !"とイタリア語で言い、その方を指さしたのである。彼女が「飛行場」という日本語を知っているはずがないのに、この絶妙なタイミングは、まるで夫の言葉にイタリア語の字幕がついていたようだった。

このときの夫はカメラを両手で持っていたので、ジェット機を指差しもしなかった。だが彼女は「言葉」ではなく「状況」を的確に判断し、語調や意思疎通の波動のようなものを正確に受けとめて発言したに違いない。「飛行場」という単語自体が意味を持っていたのではなく、これが発せられた時の付帯事象こそが、この場合のコミュニケーションにおいては極めて重要な役割を果たしたわけだ。(もっともこのときのイタリア人が年配の女性であったことも、無視できない要件だったかもしれない。幼児が訳のわからない言葉というか、声を発したときに、母親は独善的に解釈して「そうね、きれいな花ね」などと相槌を打つ。このときの白人女性も、子育てや孫の相手などの経験から、巧みに、あるいは条件反射的に我々に対応したとも考えられよう。)

このような付帯事象についての重要性は、L.L.のような学習方法では、なかなか認識できまい。また英会話の教科書で"Hello, I'm John"などと、John でもない学生に言わせるのも虚しい練習だ。それよりは、秋の晴れた日に、教師が入って来るなり窓の方を指差し、"Look at the trees. The leaves are so beautiful! It's a lovely autumn day!"と言ったなら、これを聞き窓の外紅葉を見た(府大レベルの)学生は、次回からは、自分の言葉としてこのようなことが言えるようになるはずなのだ。

もちろん彼らは中学一年くらいから、この程度の英語は知っている。だが、読んでわかるのと、自らの言葉として発するのは、断じて同じではない。残念ながら多くの学生はこれまで、後者のような英語を習ってこなかったのだ。信じられないかもしれないが、実際に教室で英語をしゃべらせてみると、なかには president (大統領) という言葉すら出てこないで四苦八苦する者もいるのだ。しかも府大では偏差値が高いとされている学部においてさえである。

コミュニケーションに役立てるには、読んでわかる英語を、自分の言葉としてしゃべれる英語にしてゆくことが肝心だ。そのために、誰かが実際の現場で、それをしゃべっているの

を聞くことも必要だろう。私が（日本語を用いず）英語で英語を教えた理由は、ここにある。そして学生各々が、「なあんだ、あんなふうに言えばいいのか、簡単じゃないか」と納得すれば自分の言葉として習得するはずだ。だから私は、できるだけ初歩的な言葉でしゃべる。こんな私の授業について、Y.T. (工) は、次のように述べている。

4月からの授業で最も印象に残っていることは、第1回目の授業でした。なぜなら、授業において日本語は一切使用してはいけない、ということが初めての経験であり、また予測していなかったことだったからです。また難しい英語や解釈の難しい英語を簡単な、分かり易い英語に直す堀江先生の技術にも驚かされました。今まで経験したことのないような授業形式で、また、物語やジョークの話によって、英語を身近なものとして感じる事が出来た、とても充実した一年間でした。（本論で引用する府大生の意見については、昨年の特論と同様、学生の個人名や入学年度もわかっているが、プライバシー保護のため、イニシャルと学部名のみを記すことにした。）

私は教科書の中に出てくる単語の意味を（英語で）尋ねることがある。学生はもちろん英語でそれを説明しなければならない。英英辞典を用いるわけではなく、初めは苦労しているが、回を重ねるにつれて優秀な学生の答え方や、私の簡単で明確な説明の仕方を、自分で身につけてゆくようになる。また英米の日常的なレベルのジョーク本をも用いるので、やたらに難しい受験英語で抜け落ちているコミュニケーション必修単語を補うこともできる。（意外にも、Jewishの意味を知らない学生が多いのだ。）

<辞書は引くな>

予習や復習時に辞書を引く、知らない単語の意味や使い方を調べるのは、当然、必要な作業であろう。ただし私が神戸女学院大学二年のとき、英文学の授業で、（ノーベル物理学賞受賞者を父に持つ）米人女性教師から、英文小説を読んでいて知らない単語があっても、いちいち辞書を引くなと言われ、驚いたことがある。そんなことをしていたら、なかなか進まなくて物語が楽しめず、読むのが嫌になるだろう、重要な単語なら何度も繰り返し出てくるのでそのうちわかるようになるはずだという理屈である。確かに我々は、和書を読んでいて知らない漢字があっても、そのたびに辞書で確かめたりはしないだろう。それと同じ、と言われればそれまでだが、やはり私としては、少なくとも授業をより理解する上で、学生に予習、つまり教科書に出ている単語の意味くらいは、あらかじめ知っておくことを求めたい。

だが、それと同時に、実際に英語をしゃべらなければならない「現場」では、辞書なしでも対応できる能力を、身につけさせておくべきだと考える。なにもそのために「決まり文句」や「とっさのひとこと」などを、丸覚えさせる必要はない。そんなものを学んでいても、「とっさ」の慌てているときに正確に思い出せるとは期待できないし、「ああ、あれ、何て

言うんだっけ」とあせるよりは、初めから、「自分の英語」で解決できるようにしておく方がいい。

「自分の英語」については、既に前号の拙論で説明した通りだ。私は学生に、新しい単語や言い方を多く学んでもらおうとは思っていない。それよりも、既に知っている単語や文法力を有効に使うテクニックを身につけて欲しいのだ。というのも、たとえば、「コミュニケーション」の場では、知らない言葉の意味は、辞書を引かずとも相手に尋ねれば済む。(授業中、私が学生に単語の意味を英語で質問するのは、この尋ね方を学ばせるためでもある。)

それで、cleverな学生は、私が教科書の内容について質問をすると、逆にその中の単語の意味を私に尋ねたりする。まあ予習をしてきていないのは困るが、黙って答えないのではなく、英語でコミュニケーションをはかろうとする姿勢については評価できる。そこで私も、"You should have looked up the word in a dictionary"と釘を刺したうえで、その単語の意味を英語で説明し、相手が理解できたところで改めて最初の質問を繰り返すのだ。このように手間隙はかかるが、コミュニケーションを学ばせるとは、こういうことではないか。

さらに単語の意味を尋ねるのは反対に、言いたいことを表すための適切な単語が思い浮かばなかったり、自分の語彙にない場合でも、和英辞典を引く間、話しを中断させるのではなく、相手に(英語で)助けを求めるのが、好ましい(英語の)コミュニケーションのあり方であろう。

私が高校二年の夏、シアトルでホームステイ先の一歳上の娘に、十二支について説明していたとき、"The year of the rat"から始まり順調に進んだのだが、最後の「猪」に当たる英単語を知らなかった。そこで"It is like a pig, but very wild"と言ったところ、"Oh! a boar!"と教えてもらえた。その翌日も、同様の方法で、この相手から"divorce"と"abortion"という言葉を引き出しながら、女子高生らしいおしゃべりを続けたのである。

辞書なしでコミュニケーションができると、語学力と現場対応能力に自信が持てるようになり、「まあ、なんとかなるさ」と思うと、ビクビクしなくなる。緊張がほぐれると、さらに実力が発揮しやすくなるに違いない。単語がわからないから黙ってしまうのでは困る。わからない単語は相手に尋ねよ、それもコミュニケーションの一端なのだ。

<自分に使える英語を使う>

現代の学生の多くは電子辞書を用いるので、確かに引く時間は速いが、コミュニケーションにおいてはあくまで辞書は最終の手段にするべきだ。特に、和英辞典に頼りすぎるのは禁物である。

英会話の不得意な日本人の多くは、英語を話すとき、まず頭の中で意見を日本語で組み立て、それを英訳しようとする。しかしこれでは時間がかかり、発言のタイミングを逃しかねないし、相手を待たせるのもコミュニケーションにおいて好ましい状態ではない。それ以上に、この和文英訳的発話の欠点は、自分が組み立てた日本語に縛られてしまうことである。

これだとどうしても話者が直訳を試み、それに必要な単語を知らなかったり思い出せなかったりして、あせり、何も言えなくなったり、辞書を引きまくることになる。あるいは、そばに英語のできる日本人がいて、「——って、どう言えばいいんですか？」と（日本語で）助けを求めることになる。

こんなシーンを、どこかで見た覚えがあるだろう。そう、2002年10月31日に日本外国特派員協会の昼食会で、ノーベル化学賞を受けることになった田中耕一氏が、英語の質問に答えていたときだ。彼は通訳担当者に"leave me alone"という言い方を教えてもらっていた。しかし私は学生に、頭の中で和文英訳をするのではなく、頭の中に入っていてすぐに使える英単語を拾い集め、自分の言いたいことを組み立てるように教えている。母語においてもまだ語彙の少ない幼児は、そうして自己主張を行っているはずなのだ。

もしこのような方法で英語をしゃべっていたなら、田中氏も"leave me alone"は知らなくとも"I want to have a quiet life"と言えただろう。（しかもおそらくは後者の方が、「そっとしておいて欲しい」との彼の気持ちにより近いと思われるのだが、いかがだろうか。）少なくとも私の授業を一年間マジメに受けた学生なら、この程度のことで隣人の助けを借りずに、（日本語に縛られながら和文英訳することなく）自分に使える英語で巧くその場を凌ぐことができると思っている。

例えば実際の授業では、この方法を次のように教えている。ある真面目な学生に、Charles A.Lindberghの偉業について（英語で）説明させた。彼女は「大西洋横断飛行」を頭の中で英訳しようとしたのだが、"Atlantic"という言葉が、とっさに思い出せないでいた。こんな単語くらい使えるべきだとあきれられるかもしれないが、前述の"president"同様、本当に自分の言葉になっていないと、こんなものである。ましてや、緊張してあせれば、なおさらだ。そこで私はこの言葉については助け船を出したのだが、さらに"the flight from New York to Paris"という説明をつけた。するとその学生は、「あ、Atlanticという言葉が思い出せなくても、こんなふうに言えばいいんだ」と理解したようで、何度もうなずいた。

おそらく和文英訳の試験で「大西洋横断飛行」と文中にあれば、"Atlantic"を忘れて"the flight from New York to Paris"では減点になるかもしれない。だが、コミュニケーションの場では、何の問題もない。それどころかLindberghに関しては、大西洋横断よりこの二都市間の飛行にこそ意味があるのだから。

もちろん単語を覚えることは大切だ。「ゆとり教育」などを提唱せず、ある時期までは一定量を詰め込むべきだ。だがせっかくなら覚えた言葉を有効に活用して、しゃべる方法を身につけなければコミュニケーションの役に立たない。それではもったいないではないか。K.M.（経）は、自分の英語で話すこの授業について、次のように述べている。

・・・先生が英語で話すということだけでも焦りがあったけど次第に授業を重ねることによって抵抗がなくなりました。自分で話すのも簡単な知っている英単語を並べ

て作っていくと言うことにも少しずつ慣れてきました。・・・読解など文法力は、自信あるのに会話はあまりできないから英語は苦手な意識がありました。しかし、この授業を通して自分から話そうとする姿勢が大事だと思いました。

<発音より大きな声が大事>

さて府大生の多くは、自分の英語の発音に自信がない。そのため自分から（英語を）話すのをためらうこともある。おそらく高校時代は受験のための英語学習が主で、実際に発音してみることも少なかっただろう。中学の英語の授業にしても、せいぜいテープを聴いて、その内容を繰り返して言う、あるいは読むだけで、教師が各生徒に正しい発音を指導したとも思えない。なにしろ府大でも、英語をカタカナ読みする学生が珍しくないのが実情だ。

私自身は、英語教育に熱心な神戸女学院で、中、高、大と十二年間を過ごしたおかげで、英語の発音においては、平均的日本人よりはましだと自負している。なにしろ中学一年の四月には、まず発音記号を教えられたのだが、その際、日本人教師と米人教師とが揃って教壇に立って授業を進め、さらに二人が手分けして生徒全員の発音をチェックして矯正するのである。（早い話が、人件費が倍額必要な贅沢な教え方だ。）そして発音記号を習い終えたところで、初めてアルファベットが教えられるのだ。

また大学英文科でも、米人教授が学生一人一人の発音をチェックし、すぐに改められないものは放課後に残され、正しい発音をマスターするまで特訓させられた。私は"ear"と"year"の区別ができなかったのだが、このときにはクラス全員が残されたため、この教授だけでは指導できず、優秀な上級生が特訓の手伝いに来てコツを教えてくれた。おかげでなんとか教授からOKをもらい、帰宅できたのである。

このような教育を受けたので、私自身、発音は語学教育において重視するべきだと、割に最近まで思いこんでいた。だから府大でもL.L.のクラスを担当したときなど、張り切って発音を指導し、個別にチェックしたこともある。だが最近では、この考えを改めた。通算数百人の発音を指導して気がついたのだが、骨格や歯の形、舌の長さなどによって、特定の発音の容易な者、不得意な者がいるようだ。たとえば私のように前歯が大きいと、"th"を発音するのに何の苦勞もない。だがその逆の学生もいる。

英語を初めて習う中学生や英語が専門の英文科生には、厳しく発音を仕込むのもいいだろうが、既にカタカナ発音癖のついた大学生を再教育するのは、（お互いの）時間とエネルギーの無駄ではあるまいか。コミュニケーションに支障をきたさない程度であれば、日本人的な英語の発音でいいじゃないか。「君の発音は間違っている、こう発音するのだ」と教えたところで、改められるわけではない。だったら、「君の発音でも十分に通じるから、自信を持ってしゃべるように」と励ましたほうが、望ましい結果が得られそうに思われるのだ。

私が考えを改めたのは、最近、相当発音が悪いにもかかわらず、ちゃんと英米人と語り合える日本人と同席する機会があったからだ。こんな発音でも相手がわかってくれるのなら、

いったい私が学んできたのは何だったのか？と。ただし、ひとつ感心したことは、この日本人は自分の発音の悪さに気がついていないのか、それともそんなことを気にしていないのか、自信たっぷりに大きなはっきりした声でしゃべるのである。そう、たとえ発音が正確でも声が小さくて相手に聞こえなくては、コミュニケーションは成り立たない。少々（いや、かなり）発音が悪くても、相手が聞き取れるような声を出すことが大事なのだ。

とはいえ我々は、自信の無いときには声が小さくなりがちである。そうならないようにあえて学生に発音の悪さを気にさせるより、それで大丈夫だから大きな声を出せ、と指導しているのだ。だがそのいっぽう、たとえば"ear"と"year"の違いについて説明をすることもある。もし彼らが家庭教師のアルバイト先で、生徒にこれを質問されて答えられなかったらかわいそうだからだ。しかし実際のコミュニケーションの場では、前後関係で「耳」か「年」かわかるのだし、両者を区別して発音しなくたっていいじゃないか。

実は30年前、台北YMCAで日本語教師のボランティアをしていたとき、生徒が「橋と箸では、アクセントが異なるので難しいですね」とため息をついたことがある。そこで私は「日本でも地域によってアクセントは違うけれど、気にしなくても大丈夫。Bridgeを手に持ってご飯を食べるはずがないから、ちゃんとわかってもらえます」と励ましたところ、「そりゃそうですね、なるほど」と安心したように彼は微笑んだ。

日本人の多くは"think"も"sink"も「シンク」と発音するが、ちゃんと通じている。授業では、これらの音の違いは説明するが、矯正はしない。（市井の有名英会話校でも、明らかな間違い以外は、指摘しないようだ。ちなみに全く英語教育の現場をご存じない他学部、他学科の先生方からは、市井の大手英会話学校Nのような授業を望む声が寄せられることがあるが、広告によればNのクラスは生徒が3-4名程度とか。府大の英語のクラスは50名以上になることもあるし、私がこれまで受け持った最大のクラスは80名を超えていた。N並の授業にするには、10倍から20倍の人件費が必要と言うことになる。）矯正に時間をかけるくらいなら、実際にしゃべる機会を多く与えた方がいいと考えている。

<アニメからでも学べる>

さて私が大学生のとき、後に阪大でジーパン事件を起こすことになる米人男性教授から、次のようなことを言われた—日本人の場合、英語がよくできても、発音は正しいのに巧く聞こえないことが多い。それは"beautiful"と言っても、本心からそう感じているようには思われなからだ。

確かに日本語自体、単調に話されるし、我々の表情もあまり変わらず、手振り身振りが加えられることは珍しい。それにひきかえ、ネイティブ・スピーカーが英語をしゃべると「派手」である。彼らの動作を我々が真似る必要はないが、コミュニケーションを円滑に進めるうえで、それらがどのようになされているのか、チェックしておくことも決して無駄ではあるまい。

そこで私は、年に一度くらい英語のアニメーション映画を見せたりもする。それは本物の人間よりもアニメに登場するキャラクターのほうが、表情など強調されて描かれているぶん、わかりやすいからだ。たとえば驚いて目を大きくするにしても、実際の人間の目が開くのは限界がある。ところがアニメだと、その何倍にもなり得る。またアニメは、言葉の全部は理解できないような子供でも楽しめるように、ボディランゲージ的要素がふんだんに盛り込まれているので、これについてもわかりやすい。

私が好んで用いるアニメは *A bug's Life* だ。昆虫が擬人化され、団結して国を守る話である。ただし筋はどうでもいいから、コミュニケーションに役立つ言語以外の要素を見つけるように指導するのだが、レベルの高いクラスほど物語を楽しみ、授業時間内に見終わらないと

「昼食を抜いてもいいから最後まで見たい」と要求してくるほどだ。(面白いことにレベルの低いクラスでは、そのような熱意は生じない。) もちろんそればかりではなく、このような娯楽作品からも、その気になればコミュニケーションに役立つヒントが学べることに驚いているようだ。コミュニケーションにおいて言葉の果たす役割は3割とも言われているだけに、非言語要素の重要性は無視できない。アニメをもとにこの点を考えさせたところ、T. M. (農) は次のように認識した—「コミュニケーションにおいて、言語だけでなく、声の高さや質、音量、口調、アクセント、会話での間合い、人と人との空間、身体的接触、服装、表情、あいさつ、姿勢、身ぶり手ぶりなど、多くの言語以外のことが大きな役割を果たしている。」

このようにコミュニケーションは、教室だけで学べるものではなく、各々の積極的な学習態度と向上心が求められる。ところが現在、コミュニケーションに使える英語教育について、大きな誤解が生じているようだ。それについては『朝日新聞』(04・9・18)の「私の視点」で、若い英語教師の吉原令子氏が、「実践的なコミュニケーション能力を高めるということがTOEICやTOEFLなどの検定試験の点数を上げるという安易な方向に流れている」と危惧しているとおりである。

大学の英語教育が検定試験勉強にすり替わるべきではない。確かに大学経営陣が求める「中期目標」や「数値目標」に対し、検定試験の高得点は都合がいいし留学や就職に必要であることも否めない。しかし試験で一定の点数がとれても(つまり理論上は正解が出せても)、「コミュニケーション」が必ず得意になるわけではない。というのも先に述べた通り、コミュニケーションは言葉だけでなされるわけではないし、そつのない決まり文句の羅列では自己アピールも望めまい。

それにしても今の世の中は、何語であれ「コミュニケーション」重視の風潮がある。『AERA』(04・11・1)によれば、就職試験において、ほとんどの企業が(日本語での)「コミュニケーション能力」を学生に求めている。この場合は「自分の言葉で語ることができるコミュニケーション能力の高さ」はもちろん、言葉以外の、たとえば立ち居振る舞いや

表情、態度、目線などもコミュニケーション能力の一端として重視されているとか。(まさに私がアニメを用いて認識させた事柄である。)

私が教えるのは英語を用いたコミュニケーションであるが、言葉は何しろ「自分の言葉」で語ることと、非言語要素の重要性を学ばせる点において、企業が求める能力をも学生につけさせていると自負している。

前述の吉原氏は、「コミュニケーションの道具として英語を使いこなせる教育に、真剣に取り組むべきだ」と議論を結んでいるが、私は、「受験英語」ばかりで本当の(英語)コミュニケーションの機会を得られないできた学生たちに、それを与えているのである。K.U.(経)は、私の授業について次のように述べている。

僕が最も衝撃を受けたのは、先生の授業の進め方です。常に先生が英語を話して(ママ)授業を受けるというのは僕自身体験したことがありませんでした。そのためかこの授業でとても英語の力が身についたと思っています。授業を皆勤できたのも、僕がこの授業形態にとっても興味が持てたということもあります。始めの頃は、受験英語ばかりを勉強してきた僕は簡単な文さえ言えなかったのですが、それが徐々に口から言葉として出てくるようになったのには、僕自身が一番驚いています。……

学生によるこのような評価が得られる限り、私は試験のためではなく、話すことに自信をもたせ、コミュニケーションに役立つ英語を教えるつもりである。

An Essay: To Teach English for Oral Communication

Tamaki Horie

Though the students of O.P.U. have studied English considerably hard, most of them think they cannot speak English, and they are afraid of trying to. In my English classes, I force them to speak English. I do not use so-called conversational textbooks, but I teach English for oral communication. In this essay the further method will be introduced for this purpose.

In order to encourage my students to speak English, I myself try to use simple easy words and expressions. Then, the students can recognize that with such words you can express yourself. Sometimes I ask them the meaning of a certain word in the textbook, which they try to explain with easy simple English. In this way, they can learn how to use English even without dictionaries.

Of course, dictionaries are necessary for the study but if you depend upon them too much in the practical situations, the communication may be spoiled. Rather you can ask the meaning or the suitable word to your conversational partner in English. Also, some students make answers in Japanese, translate them into English in their head, and then begin to speak. Instead, I tell them to pick up the simple easy English words at hand, and construct them to express themselves. If the Nobel Prize winner, Mr. Koichi Tanaka had known this way, he could have said the simple and clear phrase, "I want to have a quiet life," but instead through the translation by another he used the phrase, "leave me alone."

When the students gain confidence in their communication skill, they will not hesitate to speak English in a loud clear voice, which is often more important than "good pronunciation." As for the facial expression and body language, students shall learn from an English animation film. The students are surprised to know that even from such an entertainment, through seeking, they can get useful hints for communication. Their positive attitude is always highly valued in my class.